

桑、大橋の両氏、ならびに以文社編集部、勝股光政氏と光芒社編集部、山本光久氏のご好意に感謝する。

また最後まで、理論的水準が高く、思想的にも密度の濃い書物の出版がかつてない苦境に立たされているなかで、本書がこうして日本の読者に供されることとなったのは、ひとえに、このたび新しい出版社「月曜社」を起した二人の若き編集者、神林豊氏と小林浩氏の熱意によるものである。記して敬意を表させていただく。

二〇〇一年七月

訳者を代表して

上村忠男

〔第二刷への訳者後記〕

重版にあたって三箇所ばかり誤植の訂正をおこなったほか、著者自身が誤認しているバンヴェニストの没年（一八五頁）にかんして「一九七二年」を「一九七六年」に訂正した。また、211（一〇一—一〇二頁）および3124（一八三—一八四頁）に引用されているグレーテ・ザールスの言葉とそれに関連する部分の訳文を訂正した。（二〇〇三年二月一五日記）

〔第三刷への訳者後記〕

一、本訳書にたいしては、二〇〇一年九月末の初版刊行直後から予想以上に熱い反響があり、二〇〇三年六月に第二刷を出したのに続いて、このたび第三刷の運びとなった。その間に出た論評はすでに相当の数に上る。が、それらのなかでも、とりわけ『批評空間』第三期第四号（二〇〇二年七月）に寄せられている木村敏氏の「あいだ」と恥ずかしさ、そして証言」が重要である。

二、二〇〇一年一月には著者が来日して、立命館大学と東京外国語大学でシンポジウムが開催された。うち、東京外国語大学でのシンポジウム『現代世界と剥き出しの生』では、わたし自身も西谷修、市野川容孝、岡田温司の三氏とパネル・ディスカッションに参加し、その報告を兼ねて、『図書新聞』二〇〇二年二月一六日号に「闕からの思考——ジョルジョ・アガンベンと政治哲学の現在」という一文を寄せる機会に恵まれた。それのなかでは、著者の仕事全体について、批判的留保点もふくめた所感を述べさせてもらった。この一文はその後、二〇〇二年一月に未来社から出したわたしの批評論集『超越と横断——言説のヘテロトピアへ』に収録してある。さらに、本書で著者が「プリモ・レーヴィのパラドックス」というように呼んでいる生き残り証言をめぐる問題については、二〇〇二年五月に岩波書店から出した『歴史的理性の批判のために』の第一章「アウシュヴィッツと証言の危機」のなかでも論じてある。参看願えると幸いである。

三、本書が第三部をなす『ホモ・サケル』三部作の第一部『ホモ・サケル——主権的権力と剥き出しの生』は、高桑和巳氏による邦訳が二〇〇三年一〇月に以文社から出た。また、同三部作の第二部1をなすという『例外状態』*Sub direttore* が二〇〇三年に刊行された。こちらは未来社から邦訳が予定されている。

四、『中味のなご人間』*L'omo senza contenuto*（一九七〇年）の岡田温司、岡部宗吉、多賀健太郎氏による邦訳が二〇〇二年一月に人文書院から出たほか、『開かれ——人間と動物』*L'Avete. L'omo e l'animale*（二〇〇二年）の岡田温司、多賀健太郎氏による邦訳が近日中に平凡社から出る。月曜社からは『パートルビー』と『ポテンシャルティーズ』の出版が予定されている。（二〇〇四年六月一六日 上村忠男記）